

タイトル：2023年度 教育セミナー（第19回）

日時：2023年9月21日（木）～24日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

「ジャーヒズ著『カイナの書』におけるカイナ」

金田千澄（立命館大学大学院文学研究科博士課程前期1年）

4日間にわたって開催された本セミナーでは、多くのことを学ばせていただきました。私は9月23日に発表の機会をいただき、アッバース朝期を対象として、先行研究では音楽や宮廷文化との関わりが触れられることが多かった、「カイナ」という、奴隷身分の女性歌手と定義される存在が、成人男性同士が男性社会での関係性を強化する媒介としても位置付けられるのではないかという内容を発表させていただきました。発表者の方は修士論文の執筆に向けて研究に取り組まれている2年生の方が多く、1年生の私は発表される方の発表要旨や題目を見て、自分が本当に発表しても良いのだろうかという不安を感じながらセミナーに参加しました。しかし、実際にセミナーに参加してみた感想としては、以下の理由から発表して良かったなと感じています。

まず、教育セミナーでは中東やイスラームという括りはありつつも、分野や時代、地域の違う方々に意見をいただくことができるという点です。私は自分の所属している専修が西洋史学専修ということもあり、周囲は歴史学が専門、かつヨーロッパ地域を対象としている方々ばかりだったため、自身の研究と近い地域の研究を行っている方々から意見をいただいたり発表を聞いたりする機会があまり多くありませんでした。そのため、今回発表で近い時代・地域の方々の意見をいただいたり、発表を聞かせていただいたりすることで、自身の研究に何が足りなかったのか、今後どうすべきかが明確になりました。また、歴史学以外のディシプリンの方からも、今後の方向性や問いの立て方に対して意見をいただけたことが、これらを改めて考え直すきっかけにもなりました。

また、受講生発表だけでなく、先生方のセミナーでも多くのことを学ばせていただきました。特に、飯塚先生がお話された「イスラーム的」な行為について、どこまでが「イスラーム的」な行為かを考えることは実際に史料を読み、解釈する上でも重要になってくる点だと感じました。また、上野先生の視野を広く持つことに関するお話では、今まで似たような文献ばかり見ていた自分にとって耳の痛いお話だったと同時に、これは自分がこれからやっていくべきことであること再確認しました。

本セミナーの改善点に関しては、zoomでの参加を検討していただければと思います。今回現地で発表させていただいた身としては、発表者が対面参加することの良さを再確認したのですが、聴講のみの場合はzoomでも参加可にいただけると（難しい所は多々あるかとは思いますが）、遠方で興味関心のある方々も参加しやすくなるのではないかなと思いました。

最後に、4日間のセミナーの運営に携わってくださった皆様、拙い発表ではあったかと思いますが、的確なご意見や質問をくださった先生方、他の受講生の皆様にお礼を申し上げ、感想とさせていただきたいと思います。